

ヨーロッパの社交に関する考察

— 社交的事象の場所論 1 —

呉 谷 充 利

個と社会

近代は別言すれば、人間の「個」化に他ならない。近代に見るこの人間の「個」化は心底一人の人間として自身の心身を問いつづける一つの知的パラダイムを生むのであるが、そのような主体的な「個」にたいしていえば、いわゆる「社会」はこの圏外に位置する。社会にたいする理論は、古くはプラトンやアリストテレスの著作に見られる。その考察が、たとえば、ホブズ、ロック、ルソーらの社会理論に見るように、17、18世紀のヨーロッパにおいて現実の意味をもって大きく前進し、その主題性を高める。そのなかで、コント(1798-1857)の「社会学」は、それまでの社会理論を一挙に「学」へと高める。

ノルベルト・エリアスのことばを借りれば、「コントが行なった哲学的な認識論や科学論から社会学的な認識論や科学論への移行は、何よりもまず、彼が個人ではなく人間社会を認識の〈主体〉とした点に現われている。」¹⁾のであり、「近代」をかたちづくるもう一つの枢軸としての「社会」がここに決定的な意味をもって捉えられる。

人間社会は、一方の極にロビンソン・クルーソーのようなたった一人の人間を見、他方の極に人間が分子化され、その一挙手一投足が統制されてマス・ゲーム化する集団の圧倒的な力を見る。ロビンソン・クルーソーとマス・ゲームに見るこの人間の姿は個と社会を示す二つの極である。この二つの極のあいだに個と社会を結ぶさまざまな人間関係のしかたが現われる。

個と社会に関わるそうした人間関係の一つのしかたにいわゆる「社交」がある。本論のテーマはこの「社交」についてであるが、その優れた考察であるジンメル²⁾の社交論³⁾をここに挙げる。この社交論を下敷きにしながら、さらにこれに歴史的、文学的、建築学的つまり空間論的、場所論的視点を交えながら、このテーマについて考えてみる。

ジンメルの「社交」

ジンメルの「社交」にたいする考え方のポイントは、それが社会生活の遊戯性としてあることである。ジンメルによれば、社会化の遊戯的形式であるその社交的社会こそ、純粹の「社会」である。つまり、「社交」は平等な人間関係における人間の相互作用の様式とし

で遊戯的に成立する真正の「社会」そのものなのである。

ジンメルは個と社会が相互に作用的に関わるもっとも鋭敏で繊細な劇的ともいえる人間関係の一つの相を明るみに出している。この繊細な社会関係を可能にするものこそ、「社交」における遊戯性と平等性さらにそこにはたらく自由な相互作用であり、それは、換言すれば、一方的な社会的権力関係から脱却し、遊戯性として機能する個の社会化である。敷衍すれば、「社交」こそ、人間社会を真に「社会」たらしめる根源的なダイナミズムであるといえよう。

サロンと社交

ところでそのような優れた社交的社会の一例として、西洋の「サロン」があろう。目加田さくを・百田みち子『東西女流文芸サロン』によれば、「一般に社交を目的とし、豪華な私邸に定期的に社交界の人々、文人、芸術家、政治家のうちで著名な人々等を招いて、主として会話を始め、会食の前後に詩や物語の朗読をおこなうレセプションの場である」³⁾と説明されている。それが明確なかたちをもって現われるのは16世紀末のことであり、その発生は、中世南仏の吟遊詩人（トゥルバドール）が有力諸侯の城館に滞在して詩を詠じたことにあるとされる。

このなかで、アキテーヌ公、ギョーム・ド・ポワチェ（1071-1127）がもっとも古いそうした吟遊詩人（トゥルバトゥール）の一人として挙げられている。

ところで、そのようなサロンを成立させた条件として、余暇とガラントリー—Galanterie—が指摘される⁴⁾。詩の朗読が城館の余暇としておこなわれると同時にそれはガラントリー（貴婦人敬愛）⁵⁾を表わしている。サロンを考えるうえで、この二つの条件がもつ意味は大きい。

ノルベルト・エリアス：文明化の過程

ノルベルト・エリアスは社会学的な見方からヨーロッパの文明化について述べる。彼は「中世騎士恋愛歌および礼節ある社交的形式の発生について」⁶⁾と題し、次のように言う。

「九、十世紀の騎士たちは、そしてそれよりずっとあとでも大部分の騎士たちは、依然として自分の妻あるいは自分より低い身分の女性に対してはいうまでもないが、彼女らを一般にそう優しく扱わなかった。」⁷⁾このため騎士の立腹によって、妻の顔から鼻血が出ることは、まるで日常茶飯事のことであり、加えて妻の忠告を受け入れた騎士には世間からの激しい非難があったという。

彼が引く次の騎士の言葉は、こうした中世騎士社会の蛮風をよく語っている。

「奥方よ、お前は蔭へひっこめ。そして彩色し、金箔を張ったお前の部屋へ行け。そこで侍女たちと一緒に食べたり飲んだりし、せっせと絹を染めろ。それがお前の仕事だ。わ

しの仕事は鋼鉄の剣を振りまわすことだ。」⁸⁾

このようなヨーロッパ中世封建社会の蛮風が永い時間を経て終焉する。彼は述べる。

「宮廷の社会発生を追究していくと特に顕著な、そして同時に文明化という方向でのそれ以後のあらゆる変化の不可欠の前提をなすような文明化の過程のひとつに突き当たる。それは戦士貴族の代わりに情感を抑制したおとなしい貴族、すなわち宮廷貴族が少しずつ台頭してくることである。この戦士の宮廷化（傍点原著者）という現象は単に西欧の文明化の過程のなかだけでなく、かなり大きな文明化の過程であれば、目の届く限りどこでも極めて重要な出来事のひとつである。」⁹⁾

彼によれば、西欧における「戦士の宮廷化は11ないし12世紀から非常にゆっくりと始まり、17ないし18世紀にゆっくりとその終焉をみた」¹⁰⁾のである。こうした宮廷化のなかで「礼節」—*courtoisie*（仏）—と呼ばれる一つの社交形式、中世封建社会の蛮風から脱却する「社交形式の比較的がっちりした習慣、情感のある程度の抑制、振舞いの規制がつくりあげられる。」¹¹⁾

エリアスによれば、西欧中世社会における大封建君主の宮廷の社会発生は、同時にこれらの礼節を旨とする行動様式の社会発生を意味する。次の言葉は、宮廷化し自己抑制をもってなされる騎士の新たな行動様式を雄弁に語る。

「何よりもまず、女性には丁寧に呼びかけるよう心掛けよ。それが君にふさわしい。……（中略）……しかしもし女性の一人が君を傍へ腰掛けさせるようなことになれば、次のことをわきまえよ。彼女の衣裳の上に坐るな。またあまり近くに坐らぬよう忠告する。……（後略）……」¹²⁾

ところで、このような見方において、「サロン」の始まりを考えると、吟遊詩人（トゥルバドゥール）の詩の朗読がその先駆的形式を担っていることが分かる。というのは、新たな行動様式としての「礼節」は、吟遊詩人を通してさらに「貴婦人敬愛」という特異な一つの社会形式を生むことになるからである。吟遊詩人の詩の朗読は、「貴婦人敬愛」という新たな精神の意味、つまり中世封建社会が宮廷化へと歩むその確かな歩みを告げている。

エリアスによれば、「礼節」によってヨーロッパ社会は衝動のモデル化に通じる一步を踏み出すのであるが、その一步はまたヨーロッパの「文明化」への決定的な道程を示している。彼がヨーロッパの自意識を表わしているという「文明化」の概念は、彼の言にしたがえば「最近の二、三百年のヨーロッパ社会が、それ以前の社会あるいは同時代の《もっと未開の》社会よりも進化して持っていると信じているものすべてをまとめている。」¹³⁾のであり、「この概念によってヨーロッパ社会は、その独自性を形成するもの、自分が誇りにしているもの、すなわちその技術の水準、その礼儀作法の種類、その学問上の認識もしくはその世界観の発展などを特徴づけようとする。」¹⁴⁾

エリアスは「ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷」と副題を付ける『文明化の過程』（上、

下)において、ヨーロッパ社会の発展のなかで長い伝統をもつ、完全に自由で完全に独立した存在としての、すなわち、内面的に完全に自立し、一切の他人から隔離した、「孤立した個人」としての個々の人間像、古典主義哲学において認識論的主体として登場するその人間像を批判している。

つまり、彼によれば、個人を外皮と内に隠された核をもつ先天的に閉ざされた容器のようなものとして想定してしまうと、個々の人間の個人構造が変わるような数世代にわたる文明化の過程は不可解なままであり、文明化の過程を理解するためにはそうした近代の人間像の批判が必要なのである。そのような「閉ざされた個人」にたいして新たに「開かれた個人」が対置される。¹⁵⁾

「閉ざされた個人」にたいするこの「開かれた個人」は、「他人との関係において相対的自立性は多少有しているが、決して絶対的全体的自立性を持つことはなく、事実上は一生涯にわたって終始他人に調子を合わせ、他人に頼り切り、他人に依存している存在であり、」¹⁶⁾「相互に図柄を、つまり、種々の集団ないし社会を形成し合う多数の相互依存的な」¹⁷⁾人間像として存在するのである。彼は、国家、都市、家庭、あるいは資本主義制度、共産主義制度、封建制度において人間同志の関わる「図柄」を説明するにあたって、マズルカやメヌエット、ポロネーズなどの社交ダンスを例に引き、ダンサーの交叉し合うその仕方を挙げる。エリアスにおいて重要な意味をもつのは、人間を互いに結びつけるこの相互依存の編み物なのである。

つまり、「人間像という概念で想定すべきは、相互に図柄を、つまり種々の集団ないし社会を形成し合う多数の相互依存的な」¹⁸⁾その人間の像なのである。彼が語る「人間」はなによりも多元性において、相互に依存し合う、いわば編み物の一つの図柄の形として存在する、そのような人間の像なのである。したがって、編み合わせが変われば、そこにおける行動様式も変わる。この関わりは同時的である。

このような観点に立てば、相互依存の編み合わせにおける一つの社会の発生は、新たな行動様式の社会発生に他ならない。大封建領主の宮廷において「礼節」と呼ばれた振舞いの仕方はまさにこのことを明瞭にしているのである。

騎士的封建的概念としての「礼節」にたいして、16世紀の終わり頃になると「礼儀」—civilité (仏)—という概念が次第にこれに取って代わるようになる。

が、「礼儀」という概念も絶対主義的宮廷上流階層のなかで徐々に色あせ、それは自意識の新しい形式である「文明化」—civilisation (仏)—という概念へと受け入れられ、引き継がれる。

エリアスにしたがえば、「礼節」、「礼儀」、「文明化」は社会的発展の三つの段階を現わしているのである。

ところで、16世紀から17世紀において、騎士的封建的貴族階層が徐々に消滅し、新しい

絶対主義的宮廷貴族が形成され、それ以前の強大な騎士的封建領主の宮廷でつくられた作法形式である「礼節」にたいして、「礼儀」という概念が振舞いの新しい表現として持てはやされ、新しい社会の自意識として受け入れられていく。

彼は、ヨーロッパのこの新しい風俗の形成においてエラスムスの『少年礼儀作法論』（1530年刊行）が決定的な役割を果たしたと述べている。彼が引くエラスムスの「礼儀」の一例である。「目は穏やかで、慎ましやかで、平静であるのが望ましい。厳しいのはいけない。なぜなら、無愛想な感じを与えるからである……落ち着きがなくなってきたよきよきしているのもいけない。なぜならそれは狂気を表わすからである。やぶにらみであってはいけない。なぜなら、それは不信感を与え、底意のあることを示すからである……。」¹⁹⁾

エリアスによれば、エラスムスの人間観察は、後に「心理学的」と呼ばれる方法の最初の形式を含んでいるのであり、「礼節とその記述が、〈礼儀〉という概念によってまとめられるようになった新しい段階は、この概念と極めて密接に結びついており、しかもその結びつきは次第にますます強くなっていく。ほんとうに〈礼儀〉の意味において〈礼儀正しく〉ありうるためには、ある程度は身の回りを観察し、人間とその行動の動機に注意を向けなければならない。」²⁰⁾つまり「人間と人間との新しい関係、新しい統合の形式」²¹⁾がこのなかに生まれているのである。

カスティリオーネの『宮廷人』（1528）やデラ・カーサの『ガラテオ』（1558）の著作の出現は、西洋の社交における人間の振舞いのこの問題圏の重要性の高まりを強く示していると彼は述べる。

最後に、「文明化」について述べなければならない。エリアスによれば「文明化」という概念が文献に初めて現われるのは18世紀、50年代のミラボーの著作である。彼がミラボーの著作から引く次の箇所は「文明化」の意味を探るうえで重要である。

「もし、わたしが、文明化とはどういうことと思うかと人に問えば、ある国民の文明化とは、その振舞いの抑制、洗練された態度、上品さ、そして、その国民の中で礼儀作法が細かい法律の代わりをするようにみんなが心得ている知識である、と大部分の人がわたしに答えるだろう。しかし、これらのことはすべて美德の仮面をわたしに見せてくれるにすぎず、美德の顔そのものを見せてくれるものではない。もし文明化が社会に美德の基礎と形式を与えるのでなければ、文明化は社会にとって何の役にも立たないだろう。」²²⁾

18世紀後半になると、この「文明化」は周知の概念として、旧来の「礼儀」にとって代わる社会規範として人々に共有されていく。18世紀後半に定着するフランスの「文明化」は、続く啓蒙的、社会批判的の改革運動を推し進める深部の思想的な力になったのである。この啓蒙的改革をまさに推進した一つの社交の場所こそ『サロン』に他ならなかった。「サロン」はそこにおいて「文明化」を担う社交形式として機能したのである。

ルネサンス・イタリアの「サロン」

エリアスの『文明化の過程』は「社交的交わり」におけるエッセンスともいうべきメンタリティーを通時的、歴史的視点において明るみに出しており、人間社会におけるいわゆる「社交的事象」を考えるうえで優れた考察を含む。が、「文明化の過程」が意味するそうした通時的、歴史的視点にたいしていえば、むしろ共時的、同時代的といえる視点から改めてこのテーマについて迫ってみたい。

端的にいえば、人間の優れた交わりの場である「サロン」の文学的、場所論的考察である。

「サロン」という言葉はイタリア語の「サローネ」-sallone-（客間）に由来し、1614年以前のフランス語には見られないとされる。²³⁾ サロンの成立は、それが宮廷社会のことからであるにせよ、人々の行動様式の微小な変化によって形成される西洋の社会習慣そのものに関わる問題であったことが推察される。

この観点における研究として、前述のエリアスの著作があった分けであるが、ここでは歴史的経緯におけるいわば系としての、あるいは空間的相違における、そうした有形、無形のサロンのなかから、一つのモデルを取り出すことが重要であろう。

この一つのモデルとして、ランブイエ侯爵夫人のサロンが挙げられる。川田靖子氏は「はじめにランブイエ館ありき」と章立てし、「17世紀にランブイエ侯爵夫人のサロンに先行、並行して開かれていたサロンはなかったわけではない。しかしほぼ半世紀にわたる期間の長さや、動員したのべ人員、客層、意義からみて、このサロンを17世紀のフランス・サロンの最初で最大のサロンと呼んでさしつかえないだろう。」²⁴⁾ と述べている。

ランブイエ侯爵夫人の「サロン」について、次のように説明されている。²⁵⁾ ランブイエ侯爵夫人、カトリーヌ・ド・ヴィヴォンヌは1588年、ローマに生まれ、父親はローマ駐在フランス大使をしていたピサニ侯爵のジャン・ド・ヴィヴォンヌであり、母親はローマのプリンセスの一人ジュリア・サヴェリである。

アンリ四世はローマ生まれのイタリア人であった彼女にフランスへの帰化免状を1594年に与えている。彼女は、1600年にわずか12才で後に（1611年）ド・ランブイエ侯爵となるシャルル・ダンジェンヌと結婚している。ド・ランブイエ侯爵は1652年に死亡し、自身も1665年に他界する。

フランスに帰化して後も彼女はルネサンス・ローマの優美な気風を失うことなく、精神的なしなやかさ、活発ささらには優雅さをも保ちつづけたのである。ところが、夫妻が同候していたアンリ四世治下の宮廷の雰囲気は「垢じみたレースの襟をつけニンニクと安酒のにおいのする侍たちが入口の広間にたむろし、小刀で歯をほじくり、階段下で立ち小便をする」²⁶⁾ 「万事田舎侍風」²⁷⁾ であった。

アンリ四世時代のこうした蛮風はイタリアへのさらなる望郷を彼女に駆り立てたことは間違いない。フランスにおける「サロン」の大きな一ページを彼女は後に開くのである。

開設については諸説あるが、ほぼ同時期である。その一つによれば、1613年から1650年にかけて彼女の「サロン」は開かれている。²⁸⁾

ところで、ランブイエ侯爵夫人の「サロン」に入るまえに、今一度彼女が多大な影響を受けたイタリア宮廷社会の「サロン」について触れておかねばならない。

ブルクハルトは、ルネサンス・イタリアの社交についてこう述べている。²⁹⁾「(絶対的な意味ではないにしても) 高級な社交生活にとって、階級の差別はもはやなく、近代的な意味における教養階級だけがあって、それにたいして生まれや素性が力をもちうるのは、それが相続された富、保証された閑暇と結びつく場合だけである。」³⁰⁾

彼は、第一に中世社会にたいするルネサンス・イタリアの「身分の平等化」を社交の根幹に見る。次いで、「生活の外面的洗練」が挙げられ、生まれの違いに取って代わる個人が強い美的自意識をもって人と対するようになったと語り、ジョバンニ・デラ・カーサの『作法』がこれを例証しているとする。

また社交を根本において支えるもっとも重要な条件として「言語」が指摘される。彼は「トスカーナ方言は主として新しい理想語の基礎となった」³¹⁾ と言い、「この言語は作法にかなった高貴な拳動を補充するものであり、教養ある人間に、日常茶飯のことにおいても威儀を、そして非常の場合には外面的な品位を、保持することを強いるものであった。」³²⁾ と述べて、社交に及ぼす高い価値をこの言語に認める。この言語はまさしく社交的振舞いの第一義的意味としてはたらいた分けである。

彼は、そうした「高級な社交の媒体としての言語の価値」を明白にするカスティリオーネの『宮廷人』について触れている。

ブルクハルトは、最後にルネサンスの社交において婦人が男子と同等にみなされたことの重要性を指摘している。社交における「婦人の地位」の高さこそ、全ヨーロッパ的拡がりにおけるサロンの発展を根幹において支えるものであり、それは中世の蛮風、もっといえば世俗権力世界を払拭するまさに象徴として機能したといえよう。

ところで、ヨーロッパのサロンの先駆をなすイタリア・ルネサンスの宮廷サロンを考えると、重要なのがマントヴァ侯爵夫人イザベッラ・デステ (1474-1539) とウルビーノ侯爵夫人エリザベッタ・ゴンザーガ (1471-1526) であるとされる。³³⁾

この二人は縁戚関係にあり、ウルビーノ侯爵夫人エリザベッタ・ゴンザーガはマントヴァ侯爵夫人イザベッラ・デステの義姉になる。「マントヴァとウルビーノは、両君主夫人(この二人を指す。)の書簡往復と相互作用によってその時々の文化生活の非常に高まりを見せた。」³⁴⁾ のである。

イザベッラ・デステは「現世のプリマ・ドンナ」として崇められ、³⁵⁾ 芸術作品にたいして確かな眼力をもつ熱心な収集家であり、そのサロンにおいては、ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオが熱心に読まれたとされるが、彼女はその一方で「ペテイコートを着けたマキ

ャヴェリ」³⁶⁾とも呼ばれ、傲慢なまでに並居る当時の芸術家（レオナルド・ダ・ヴィンチもこのなかに含まれる。）に無理難題を強い、彼らには冷酷な支配者として振舞ったとされている。こうしたことからいえば、サロンとはいえ、彼女のそれは多分に封建的遺風を残すものであった。

これにたいし、ウルビーノ侯爵夫人エリザベッタ・ゴンザーガは、カスティリオーネの『宮廷人』のなかで、「……公妃の御前に寄り集うごとにみなはこよなき満足にみとされるのであった。……(中略)……このように周囲のものどもは、公妃の印象を深く心に刻みつけられるので、みなこぞって公妃のお人柄やお姿にそぐおうとつとめるかにみえた。そこでみなは、これほどに高德の公妃を眼前にして、あたかもよい嗜みの手本を学ぶかのように、公妃の拳措言動を真似ようとつとめたのであった。」³⁷⁾と描かれており、対照的といえ、余りにも二人は対照的である。

ウルビーノのこの「サロン」なくしてカスティリオーネの不朽の著『宮廷人』はうまれなかった。ブルクハルトはこう述べている。

「カスティリオーネの描く〈宮廷人〉は、いまや、宮廷のために、しかしけっきょくははるかに多く自己自身のために、自己を完成する。それは本来、当時の文化が必然の、最高の開花として要請する社交上の理想的人間である。そしてその人間が宮廷のために規定されている以上に、宮廷がその人間のために規定されている。」³⁸⁾

ここにおいて、社交上の理想的人間という新たな社会理念が発明され、ルネサンス・イタリアの一宮廷サロンを通して、それが描かれようとする。

注)

- 1) ノルベルト・エリアス：社会学とは何か 徳安彰訳 p.34 法政大学出版局 1994
- 2) ジンメル：社会学の根本問題 「社交」 清水幾太郎訳 岩波書店 1979
- 3) 目加田さくを・百田みち子：東西女流文芸サロン ―中宮定子とダンブイエ侯爵夫人― p.202 笠間書店 昭和53
- 4) 川田靖子：十七世紀フランスのサロン p.9 大修館書店 1990
- 5) 目加田さくを・百田みち子：東西女流文芸サロン 前掲書 訳による。
- 6) ノルベルト・エリアス：文明化の過程（下）波田節夫／溝辺敬一／羽田洋／藤平浩之訳 pp.103-140 法政大学出版局 1992
- 7) 同所 p.121
- 8) 同所 p.122
- 9) 同書 p.377
- 10) 同所
- 11) 同書 p.131

- 12) 同書 pp.137-138
- 13) ノルベルト・エリアス：文明化の過程（上） 赤井慧爾／中村元保／吉田正勝訳 pp.68-69
法政大学出版局 1993
- 14) 同所
- 15) 同書 p.50
- 16) 同所
- 17) 同所
- 18) 同所
- 19) 同書 pp.142-143
- 20) 同書 p.183
- 21) 同所
- 22) 同書 p.118
- 23) 目加田さくを・百田みち子：東西女流文芸サロン p.201 前掲書
- 24) 川田靖子：十七世紀フランスのサロン p.21 前掲書
- 25) CONFÉRENCES DU MUSÉE CARNAVALET (1927): LES GRANDS SALONS LITTÉRAIRES
(XVIIe & XVIIIe SIÈCLES)PAYOT,PARIS 1928
- 26) 川田靖子：十七世紀フランスのサロン pp.30-31 前掲書
- 27) 同書 p.30
- 28) 目加田さくを・百田みち子：東西女流文芸サロン p.226 前掲書
- 29) ブルクハルト 責任編集 柴田治三郎 「社交と祝祭」 中央公論社 1995
- 30) 同書 p.397
- 31) 同書 p.413
- 32) 同所
- 33) ヴェレーナ・フォン・デア・ハイデン＝リンシュ：ヨーロッパのサロンー消滅した女性文化の
頂点ー 石丸昭二訳 p.20 法政大学出版局 1998
- 34) 同書 p.22
- 35) 同書 p.21
- 36) 菊盛英夫：文芸サロンーその多彩なヒロインたちー p.11 中公新書 昭和54
- 37) カスティリオーネ宮廷人 清水純一 岩倉具忠 天野恵訳注 pp.29-31 東海大学出版会 1994
- 38) ブルクハルト 責任編集 柴田治三郎 p.422 前掲書

主な参考文献

- ノルベルト・エリアス：社会学とは何か 徳安 彰訳 法政大学出版局 1994
ジンメル：社会学の根本問題 清水幾太郎訳 岩波書店 1979

目加田さくを・百田みち子：東西女流文芸サロン ―中宮定子とダンブイエ侯爵夫人― 笠間書店
昭和53

川田靖子：十七世紀フランスのサロン 大修館書店 1990

ノルベルト・エリアス：文明化の過程（上）赤井慧爾／中村元保／吉田正勝訳 法政大学出版局 1993

ノルベルト・エリアス：文明化の過程（下）波田節夫／溝辺敬一／羽田洋／藤平浩之訳 法政大学出版局 1992

CONFÉRENCES DU MUSÉE CARNAVALET (1927): LES GRANDS SALONS LITTÉRAIRES (XVIIe & XVIIIe SIÈCLES)PAYOT,PARIS 1928

ブルクハルト 責任編集 柴田治三郎 中央公論社 1995

ヴェレーナ・フォン・デア・ハイデン＝リンシュ：ヨーロッパのサロン―消滅した女性文化の頂点―
石丸昭二訳 法政大学出版局 1998

菊盛英夫：文芸サロン―その多彩なヒロインたち― 中公新書 昭和54

カスティリオーネ宮廷人 清水純一 岩倉具忠 天野恵訳注 東海大学出版会 1994